

検証データブックを編むにあたって

九一年七月、大学設置基準が改正されてから三年を経た。本誌も季刊として十二号を数え、歩みを同じく、教育と研究の充実为重点をおいて編集を進めてきた。この間の大学改革は、カリキュラムの改革を核として組織編制に及ぶ、はつきりと眼に見えるものであった。「定性的」という、当初聞き慣れない言葉の真価が問われるのは、これからである。

しかし、最近のIDE誌（九四年八月号）で、東大理学系研究科の久城育夫教授がいみじくも心配されているように、「教官の時間的余裕が次第に無くなってきており、最近ではそれがとくに異常な状態に達したといえる」、「このような時期に教官になった若手研究者は、大学とはこれが普通の状態であると思うかもしれない」。そして、こうした「時間の劣化」が進めば、教育研究水準の低下を招き（いや、すでにそうなりつつあるか）、将来が憂慮される。「それでは如何にして教官の時間を取り戻すか」として、お考

えを述べられている。私の勤める私立大学でも、程度の差はあれ、同じような状態になりつつある。国立大学の法学部の友人は、この状況を「向こう岸の見えない河を泳いでいるようなもの」と評している。もちろん、いろいろな仕事をしてきた人である。

であるからこそ、単なる「対応」に終わらない大学人独自の視点からの大学評論が重要なのである。そして、現在おこなわれている大学改革の仕事が、本当のものになるようなゆとりある思考を生み出したい。このための基礎資料になるよう、「検証データブック」を編集した。

設置基準改正後の大学改革のキーワードである①教養部改組、②大学院大学化、③シラバス、④高等教育財政、⑤新設大学・学部、⑥短期大学の六項目の検証をすることができた。他にカリキュラム改革、授業評価などの検証の必要性があるが、今号では果たせなかった。（田子健）